



今日の芸術



幸田優介

成人式を迎えたころ、私は陰鬱な日々を過ごしていました。

私は生まれ育った家庭の経済的な事情で、高校を卒業すると、ある製造業の会社に勤めることになりました。製造に従事する立場の者は、三交代勤務でした。仕事の内容は単純な流れ作業で変化の乏しいものです。私の役割は、製品加工を自動的に行なう機械装置の工程を補う人員でした。

難しい仕事ではなく、創造性など欠片もありません。言うまでもありませんが、専門知識の必要性もなく、中学校を卒業した程度の学力があれば、誰にでもできる仕事です。会社の先輩格である十年選手でも、私のような一年選手であっても、仕事の内容にかわりはありませんでした。

生計を立てるためだけに働くことを考えれば、取り立てて、不満はそれほどありませんでした。給料も悪くは無かったですし、休日も充実していました。ただ、仕事が単調で喜びがないことと、三交代勤務で生活が不規則だったことがあります。生きるために、現実の生活の流れに目を瞑っていれば良かったのに、私は与えられた現実を我慢することができませんでした。

親しい友人たちは大学に進学し、女の子と遊ぶ目的で免許を取得し、争うように車を購入していきました。そして遊ぶお金を稼ぐために、アルバイトを熱心にするようにもなりました。私は生計のために、家族を支えるために仕事をしていたので、彼らと共感することがなくなり、少しずつ、距離ができてしまい孤立していったのです。そして、常に他人と対比する自分自身の卑屈な考え方にも嫌気が差していました。

「高卒だから選択肢も与えられず、このまま会社に勤め、単調な仕事をして一生を終えてしまうのか」と、考えると、生きていくことに対して戸惑いを感じ、深い悩みを抱いてしまいました。そして不眠症になり、カウンセリングと睡眠薬を受け取るために、病院に通うことになりました。

そんなある日、週刊誌で「岡本太郎の悩み相談」の紙面に触れ、刺激を受けました。そして初めて彼の著作を読んだのが「今日の芸術」でした。何か、救いを求めるようにして夢中で読んだ記憶があります。

「美術史をめくれば、同じことが繰り返されていないことがわかる。常に新しいモノが生まれ、そして進化する。たとえ世界を変えられずとも、自分を変えることは可能だ。」（岡本太郎著書・引用文）

この著書を読んで、たくさんの刺激的な言葉に感化されましたが、その中でも、「たとえ世界を変えられずとも、自分を変えることは可能だ」の一文に衝撃を受けました。

自分を変えることは出来る。そのことに気づいたのです。自分の置かれた生活環境は、自分自身で変えることが出来る。と。

そのことに気づいたとき、とても高揚とした気分になったことを憶えています。今まで、生まれ育った環境が悪いからこんな生き方しかできないと嘆いてみたり、他人の生活を羨むことばかり考え、嫉妬心の塊のような自分自身を恥じるようになり、前向きに物事を考えるようになりました。自分自身の生活環境を、自らの力で変えていこう。そんな気持ちが、ふつふつと湧き上が

ってきました。

その後、会社を退社して望むべき仕事を必死に探し、現在の礎になる会社に就職することができました。その職場で研鑽を積み重ね、そして独立し、現在は満足の行く仕事で生計を立てています。生活環境を変えることはできましたが、最終的には、兼業作家を目指しています。まだ、実現には遠く及びませんが、強い意志で挑戦したいと思っています。

私にとって、「影響を与えられた一冊」の書物に出会えたことは幸福だったと思います。あの本に出会えていなければ、今日の充実した生活環境は実現していないだろうと思います。そして更に充実とした日々を過ごすために、兼業作家の実現に向けて、目的意識をもって鍛錬していきます。